

武井 麻子\*

Asako Takei, Ph.D., R.N.

## 3.11と人間の絆

2011年3月の東日本大震災以来、「絆」という言葉が巷に氾濫するようになった。確かに、かろうじて生き長らえても、帰るべき故郷を根こそぎ奪われ、一家離散を余儀なくされるような状況にあって、唯一生き延びるためのよすがになるのは人とのつながりをおいてほかにはないに違いない。被害の規模の大きさが明らかになった直後から、多くの人がボランティアとして被災地に赴き、救援活動に携わった。

現在も、筆者の勤務校ではいわき市に避難した福島県双葉郡浪江町民への支援活動を続けている。浪江町は、福島第1原発事故で警戒区域と計画的避難区域に指定され、全町避難となったのだが、町の仮設住宅は県内30か所に散らばり、2012年2月28日現在もなお、国外12人を含めて、福島県内14,590人、県外6,581人、計21,171人が避難生活を続けている。

現在、町の行政機能の中心である町役場は、浪江町の西50キロメートルほどの位置にある二本松市に置かれている。第一原発が爆発した際、浪江町民はいったん西側に避難したからである。しかし、そこは雪深い内陸部にあるため、浜通りの比較的温暖な気候に慣れた浪江町民にとっては暮らしにくかったようだ。そのため約750世帯がさ

らに浪江町の南50キロの海沿いにある福島県いわき市に移動し、町が戸別に住宅を借り上げる形で避難生活を送ることになった。

そこでは1戸1戸分散しているため、避難住民は仮設住宅のように寄り集まって助け合うことも、まとまって援助を受けることもできないまま、孤立したまま暮らしている。町役場のある二本松市からは70キロ以上離れており、町の保健師の訪問などとても期待できない。しかも、ほとんどが一時的な避難生活と思っており、住民票は浪江町に置いたままである。昨年、原発避難者特例法が成立して、住民票を移さなくても乳幼児と高齢者・障害者は避難先の自治体の行政サービスを受けられるようになったのだが、それ以外の人々は依然として蚊帳の外におかれたままとなっている。また、いわき市内にも津波の被害を受けた人々がいる上に、浪江町以外からも多くの避難者があり、限られた市の予算の中で避難者に行政サービスを提供することにはかなりの無理がある。こうして行政の谷間に落ち込んでしまった人々の健康調査を兼ねて訪問活動をしようということで、日本赤十字本社の支援のもとで大学が教員を派遣することになったのである。

ところが、いざ訪問しようすると、赤十字マ

ークを外した車で来てくれという人がいたり、原発避難者が住んでいると思われたくないで遠くに車を止めて目立たぬように来てくれという人がいたりするという。なぜ被災者だけがそうした特別のサービスを受けられるのかと不満に思われているのではと、市民の目を気にしているのである。実際、人口が急増した上に体調を崩した被災者が医療機関に殺到して、窓口が今まで以上に込み合うようになり、原発避難者には医療費の窓口負担が免除されているため、いわき市民から不満が高まっているという。ネット上でも「補償金をもらって働かない避難者」に対する批判記事も目に付き、補償金を巡っては被災者同士の間にも、反目を引き起こしている。さらに、津波被災者にはなぜ原発被災者だけが優遇されるのかという不満があるらしい。そうした雰囲気、町民を疑心暗鬼にさせているようなのだ。

震災直後には、互いに助け合い協力しあう、一種の「災害ユートピア」が報じられたが、徐々に現実が明らかになるにつれ、人々の高揚感は一去り、かわって絶望感がじわじわと人々の心を浸食しているように思われる。

\* \*

しかし、被災地に限らず、震災が起きた直後から、そうした亀裂は見えないところで起きていたような気がする。私自身は、平成23年3月11日、京都で揺れを体験した。おりしも第28回日本集団精神療学会のプレコンgressが開催されていた最中であった。体験グループの途中で揺れを感じた私は、一瞬、めまいの再発かと不安に駆られたが、自分以外にも感じた人がいて地震なのだと一安心して残りの時間を過ごした。そして、休憩時間にテレビで津波が東北地方を襲う映像を目の当たりにしたのだった。

新幹線で京都に向かっていた大学の若手教員は、10時間かけて夜遅く京都に到着した。途中で、避難食が配られたという。以降の新幹線は運休となり、学会に来られない学会員が出ることは明らかだったので、早朝、臨時常任理事会を開いて、学会を開催すべきかどうかを話し合った。それはそ

れで緊迫した時間だったのだが、その緊迫感はいまだ新幹線で地震を体験した人とも、東京でそれを体験した人ともまったく違ったものだったと思う。

学会場でも、自宅がどうなったのか、果たして帰れるのかと不安な面持ちの人がいて、同情もし心配もしたが、実家にも遅まきながら連絡がとれて一安心したこともあり、私自身は事態の深刻さが本当には感じられなかった。自宅に帰っても、家の中はほとんど無事であった。その後の計画停電も、自宅と職場のある地域は除外区域となった。それでも地震後の津波や原発事故を報道する映像は、できる限り見ないようにした。

こうして、3.11を私はできるだけ自分から遠ざけていた。半分意識的に、半分無意識的に。被災を体験した人が「他人には決して分かりはしない」と思うのも、もっともだと思う。私は分かりたくなかったのだから。しかし私の周囲では、震災直後からたくさんの人が被災地に赴いていた。私自身はそのコーディネーションを行う立場となり、被災地に向かう人たちを孤立させないように、夜も昼も頻繁にメールでやりとりをして、それを関係者にも送信した。自分自身は現地に身を置けない申し訳なさもあった。2か月後にマルタ共和国で開催された看護の国際学会で、依頼されて日本の被災状況を発表したのだが、私がこんな発表をしてもいいのだろうかという気持ちが終始つきまとった。

\*\*\*

その後、救援に行った人を集めて、デブリーフィング・グループを大学で開くことにした。これまで救援に行った人の多くが、その体験を人に話す機会がないと感じていたからである。報告会を開催しているところもあったが、そこで求められたのは「被災地は・被災者はどのようであったか」「自分たちは何をやったか」という話であり、実際には「被害の大きさに圧倒された」「自分は何もできなかった」「何の役にも立たなかった」と思いながら、「それは言えない」「話しても分かってはもらえない」と感じていたのである。

ところが、普段、研究会に参加しているごく親しい仲間ですら、つもりだったのだが、意に反して、これまで参加したこともない人まで次々にやって来て、40人近い大グループとなってしまった。そこで、一人ひとり3.11体験から語ってもらったのだが、そこには同じ体験をしたという人は誰一人いなかったのである。一人ひとりが、その瞬間それぞれの場所でそれぞれのことをしていた。そして、その体験と結びつく過去の体験があった。たった1日の体験でさえそうであった。その後については、実際に被災地に行った人も私のように行っていない人もおり、その体験のインパクトには

明らかに落差があった。その痛みを言葉にできないまま、共感よりは不全感を感じた人のほうが多かったのではないだろうか。

誰とも気持ちが通じない、分かりえないという感覚は、人に絶望的な無力感を抱かせ、不安にする。これが、被災ということの最も深刻な部分なのだろう。長期的に見て日本全体（もしかしたら地球全体というべきなのかもしれないが）にどのような影響を及ぼすのかを、じっくり見つめていかなければならないように思う。どのようにこれを生き延びるのかも。